

中川根ふる里通信

= 第 25 号 =

編集・発行・モアラフ中川根
連絡先 〒428-03
静岡県榛原郡
中川根町上巻尾 857-6
ふる里通信係
郵便振替口座 (名寄尾) 7-81556



雪国や高山の春は、短期間にやって来ると聞きます。
梅も桜も木々の芽吹きも同時で、それは見事だと——。
ふる里の春は 2 月中旬からはじまり、草木、順をおって芽生え開花
します。こしの桜は早かった。今は、八重桜、藤、つつじも満開。
春の日射しに、美しく輝いています。

中川根町茶業大会



平成3年度 中川根町茶業大会が
3月22日 山村開発センターで開催されました。
記念講演に 長野出身(上長尾地区内)の
山田新市氏が「お茶の歴史と川根茶」を
力演してくださいました。

山田氏は、東京にお住まいで、昭和37年、
牛舎書舎を創立されました。文学一途の人です。

主な著書『長歌節論』『小林多喜二論』『茶108章』
主な編集書籍『日本のお茶』『日本の歴史』『世界伝記大辞典』

流域文化圏の復興と創造を

中川根と大井川を思う

山田新市

『日本の流域文化』にアプロウチする試みに、ある種のも
どかしさがあるのは、流されているものを感ぜられるから
かも知れない。その「流される」というのはときに「時代」に
であったり、また「地元」にであったり、自身の主観にであっ
たりする。もちろん人は誰でも自分の眼鏡でしかものを見よ
うとはしないのだから、たとえ眼鏡越しであれ、その文化史
論的な意図まで非難するつもりはないのだが、しかしさま
ざまなものは「流され」ているのを見るのは寂しいものだ。

たとえば、大井川。かつて芭蕉が

「さみだれの空吹きおとせ大井川」と詠み、また蕪村も
「みじか夜や二尺落ちゆく大井川」と詠んでいるのを見
れば、大井川は激しい流れを持った川だったようだ。それほどの
水かさには、私の知っているころにはもうなかつたが、しかし大井川
は、その流域に特徴的な文化圏を抱えた川だったらしいことは想
像がつく。川をへだてた兩岸の人々の方言まで(語彙もイントネ
ーションも)が違ったのには、古くからそれなりに別個な交流世界
があったからである。中川根から本川根にかけての方言の分布
を調査した人から、とくに中川根の方言には信州方面との交流の
存在を推測させる特異な個性があると教えられたことがある。
それは固有の歴史というものだろうが、歴史を知る、その中か
らしか、明日を見るレンズは作り出さないと、私に思わせる
理由の一つだ。

大井川と中川根について、私たちはたくさん知ること
知っている。帆を張って大井川をさかのぼる船の資料写真を「小
る里通信」が掲げたことがある。鉄道が通るようになる前の
それはいい風景だった。その風景は、私たちちが子どもの頃には
すでに消えてしまっていた風景だった。「中川根の屋号」

という町史研究会による聞き書き集を見て、南朝方
武士の頭目だった楠木一門の旗印である菊水紋所
とする家がある、ともはじめて知った。しかし、郷土

史研究のシンボルのようなテーマである南北朝期
や戦国期以後の城跡や、本来はもっとメインテ
ーマであるべきはずな、人々のなりわいの歴史
については、ほとんど知らないままになっ

ている。その中で、中川根のお茶は、ど
んなにかさつを経て、来ているものなのであろう。



川根茶という呼び方が、いつ頃から定着したのかさへ、寡聞にして知らないが、江戸でのお茶の流通機構の恣意的な整備に反対して、流域茶農家が立ち上がった訴訟事件だったという「文政茶一件」の規模から想像すれば、すでに茶は、中川根周辺で第一の生業になっていたのにはちがいない。しかも「文政茶一件」は単なる訴訟事件ではなかったらしく、金谷から五和あたりにかけて、役人の立入りをほむビケットまで張られたというから、一揆に近いものだったのだろう。中川根でそうしたことか起きたということが自体、私たちにはある驚きなのだ。しかし、その頃の茶生産の状況が、勝山家文書として残されていることを、つい一〇年ほど前まで私は知らずにいた始末だった。

そして問題は、今の太井川流域、今の中川根、今の川根茶というところだろうか。やっといくらかは、水が流れるようになっていくが、一時はその水さえ消されてしまったという。大井川流域の特徴的な景観だった茶園が生んだ川根茶は、今や危機にあるという。いったんは、そのうち川根茶も「三チャン茶業」になるかも知れないよ、とも聞いた。あわせて農家は、当世全国に共通の後継者難だという。

東京にいて聞見するつぎのようになると、それはそれは裏表なのではないか。もう何年も前、事務所へお茶を売り込みに来たお茶屋があった。

川根茶という触れ込みだったが、聞いてみると、

工場は相良あたりで、葉も荒茶も、川根とは

縁がなかった。東京で「川根茶」というブ

ランド名は、すでにこんな風に使われるよう

になっていたのである。たとえ川根茶がな

くなくても、「川根茶」というブランド名

だけは残るのだろう。



そして東京の友人たちに知られる大井川とは、もはや話題としては、旧聞にさえ属する。「金喜老事件」と、Sの走るところ、としてくくりである。しかし連句の会などで引合いにだされる芭蕉や、魚村は、所詮東海道の助だけのこと。しかも、すべては「話題」として、「三チャン茶業」の後継者難のという悩みは、「話題」としてさえ聞かえて来ていない。

大井川の特徴的な景観は、まさに「耕して天に到る」として、大井川に水がなくなったことが、あげられるであろう。銘茶の産地に求められる、さまざまな自然条件の中でも、水量豊かな川から立つ霧の深さがあげられるのは、同じアッサム茶のなかでも高地産の茶が優良とされる、ことでも納得される。

たまたまこの三月、私は中川根で、お茶についての卑見を述べる機会に恵まれることになり、日本のお茶と川根茶についての一応のレポートは用意したから、それについては、ご批判を待つしかないが、しかし肝心なことは、大井川流域の生産文化を復興・創造するということである。お茶は、その中で、いわば各論の第一というところであろう。そして多分、総論においても、各論においても、共通して大事なことは、中川根がどこにもないモノを持つこと。それは何か、どうしたら持つことが出来るかというところではあるまいか。

言い替えれば、大井川流域にだけ固有な生産文化を確立することであろう。私は、お茶について話す、せつかくの機会を、大井川の流域文化の問題として、考えてみるつもりである。



文政茶一件のこと

幕府は、文化十年（一八一三）に、江戸の茶問屋を二十軒と指定して、株仲間としての特権を与え、その後の新規加入を禁じた。在郷の茶商は、生元（生産者）から集めた茶荷物は、茶問屋二十軒より他へは送ることはできなくなった。

それから九年後の文政五年（一八一八）の三月、川根二十ヶ村の村役人は連判として、茶荷物は昔のとおり、江戸表へ自由に積み送って、売買できるやうにしていただきたいと願ひ出た。

★近年茶値段が、格別に安くなったのは、二十軒の茶問屋仲間が、申し合せて勝手に相場をさめて、仕切り値段を安くするためでは、ないかと思われる。このやうに茶が安値になると、年貢に納はもうろんで、きなくなり、百姓の暮しも立ち行かないと思ひますので、願ひのとおり、お聞き済みくださるやうに陳情した。か、聞き届けられなかつた。

文政六年十一月、安倍郡奈良間村名主九郎右衛門、榛原郡葛巻村名主作左衛門が惣代となり、駿河遠江の一ニニヶ村が茶加として、江戸の茶問屋と在郷の茶商人等を相手取り、茶の流通について不正があるとして、大規模な訴訟を起した。訴訟人の言い分は

★文化十年に茶問屋二十軒と定めてから、生元では規則に従つて江戸へ茶を送ってきた。ところが近年特に安値となつたので、不審に思ひ調査したところ、江戸の茶問屋と荷主（茶商）は共謀して、茶壺箇から二貫目を横領し、さらに銀六匁を引きおとし、上納分として壺匁を取り、両者なれ合い配分していると聞ひたので、裁判によつて、不正な利得を糾明してもらいたい。ということである。

これに対して、相手方となつた川根の茶商仲間、伊久美村の平四郎と藤川村の平兵衛の両名を代表として、訴訟人の言い分は事実と相違す



ると、次のやうに反はくした。

★茶商は、茶ができ次第、その時の相場で生元から買ひ取り、全部の勘定を済まして、江戸へ荷を送るので、江戸の茶問屋は仕切り値段より後で、生元の勘定にかかわるやうなことは全くない。

近年は茶の生産が高まり、問屋に出来る量も増加し、その上一般が不景氣になつたため、以前に比較して、二割位は安値になつたと思ひ、半値にも及ばない安値といふのは、これまた違つてゐる。茶の値段は、その年の豊凶によつても高下があると思ひ、私共が送り出す茶荷物は、壺箇水目八貫四匁で発送するから、江戸の問屋に着いてから、強目に掛けると壺箇には三、三匁、又水目へりがあり、その上役引き壺箇目、荷痛粉割等と、おとしを三匁、又とみて、合計を貫目位は引けると思ひます。不問（茶商、取引外荷（生元直送）と區別したり、銀六匁を配分、銀壺匁の冥加金といつて共謀して横領するなどは一向に存じてゐない。

またたとへば訴訟方のいうやうに、私共の送荷物は切り金の中から茶問屋で種々引きおとしと、それは私共荷主、めいめいの損失で馴合ひで私共をはかることなど全くない。

近頃茶が下通になつたのは、江戸茶問屋二十軒とよまつたために生産地から思ひまつのところへ送るやうなことができなくなり、老買の範圍がせまくなり、だんだん下値になつたので、百姓の暮しもたつてゐるために、村々から控書を出させ、惣代を立て、江戸において、お荷をもととり自由にできるやうに願書と差し出した。当年は入用が多く、私共も、生元の村々の百姓も、暮れの期に差支え難儀してゐる折、私共と相手取り訴訟を起したことは不当至極である。

近郷の村々には、私共より別に多量に茶を仕入れ、出荷してゐる者も多いのに、私共だけを訴へたことも理解できなく心外千萬である。

このやうに、川根の茶商代表は、訴訟人の言い分は、事実と相違し

川根茶商仲間には不正はないと力説している。

文政六年十一月、駿遠一ノ二村の茶生産家が結束して、茶問屋、茶商人を相手に起した訴訟を受け付けた勘定所は、双方を呼び出して四年にわたって吟味を行った結果、文政十年(一八一七)十二月、訴訟人の申し立ては、それを立証する証拠がなく、この上吟味を行なうことはできないという理由で、訴訟を却下した。訴訟人と相手側は、この判決に対して、「被仰渡奉畏候」と御請書を出し、文政茶一件は一応落着いた。

この結審のとき、相手方の内、六郎右衛門ら八名は、過料三貫文ずつを申し付けられた。理由は、六郎右衛門らは、奉行所で吟味中、勝手に訴訟方と内清の話を進め、問屋共に不正があるなどといったことは、不埒であるといふことであつた。

また相手方の清兵衛は、吟味中、訴訟方へ、問屋共に不正の事実があると書状に記めて、送つたことは不埒であるとして、過料五貫文に処せられた。

なおこの清口(訴訟が結着となること)請書等に九郎右衛門の覚えとして、結審申し渡しのとき、訴訟人側は勘定所に、問屋ともに不正の疑いがあるので、なお吟味をしてもらいたいと申し入れたことが附記してある。

中川根町史資料編 町内所蔵古文書解説 註釈より

勝山家文書(下泉)

余録

鈴木保家文書(四野口)

*生産元を苦しめた。江戸の茶問屋二十軒の特権も、判決後、時代は幕末動乱期をむかえ、幕布衰退とともに、うやむやに終わつたらしい。

*足かけ六年に渡る訴訟で、地名村筆頭名主庄兵衛は、たび重なる江戸への出張で、私財を使い果たしたと言われている。

セツ峰登山紀行

無双連山から高山の嶺線続きにやがて智恵山、天狗石山、セツ峰、三ツ峰と、榛原郡(本川根町)静岡市堺に二五〇〇m前後の峰々が連なっており、四月十二日山登りの友人とセツ峰登山に行つて来す。登山は大変と言われる方々も多いと思いますが、新緑の奥大井のすばらしい眺望と、長島ダム関係で日々変わり行く姿も、心算に当たらないと思ひます。

本川根町奥泉から静岡市井川まで大井川鉄道井川線のほかに道路も、全線舗装されています。(ただし悪路)今回は井川、富士見峠、手前よりの路と取りました。農道をしばらく行くと、車道終点、下別当(ゲバシ)と言う、三ツ峰付近の高原となり、いよいよ登山始まりとなります。

標高一〇〇〇m以上からの登り始めですから、いよいよ尾根道ですから散歩き分で行けます。が、四月と言つても、冬山で木々は芽吹いていません。多少の高低と南下すると、一時間少々、セツ峰頂上に着きました。午後には雨の天気予報のこどく、富士山や南アルプスの雄姿は霧にかくれ見られませんが、深山幽谷、峰々を渡す、わやかな風は、明日への希望と与えてくれます。

山頂から南へ下ると、天狗石山、智恵山方面へ行く道があります。(約三時間)今回は来た道と引き返しました。は、十分後引き返した所で道は二手に別れ、四人のパーティは、ミミで二人ずつに組み、一組は自動車、関係上下別当の方へ、もう一組は梅地(本川根町)に向つての道を行きました。梅地までの道は、大変な悪路で、本道がくすれていて、回り道あり、倒木ありと、さんざんでしたが、途中、山の神様の鎮座されている所や、梅地の里近くの山中に、鈴鈴石神社と読むことすうむつかしい社がありました。いそぎ足で下ると三時間、井川経由の組に、梅地で大変おまたせと、少々心配をさせてしまいました。下別当の事と山の神様の件は、十二ページに余録します。



藤田 幸男さん（瀬平）

下長尾にあった中川根農協本所と
同所に建て更えられた キタハイ農協
(中川根支所)



昭和37年といえば、農協も果敢的に合併が提唱され、当時の中川根農協も、徳山農協との合併の気運にあった。しかし、結局は昭和39年に金谷以北の8農協が大同合併し県下においても大型の「北榛原農業協同組合」として発足した。

昭和36年1月に現在の下泉橋が永久橋として竣工し、路面が高くなったため農協の建物も、かさ上げされたのである。この写真は、その少し前のもので、玄関前の樹木は、その数年前まで荷馬車をつないで、飼料を与えながら休ませた木陰でもあり、春の桜とともに懐かしい思い出がある。当時は建物の換り裏も、みんな田んぼで、初夏の宿直の夜には、螢が舞い込んだり、カエルが夜もすから鳴いたりしたものだ。また横の坂には、川魚がいっぱい泳いでいたりしてよく見たりしたものだ。

終戦後の一日当たりわずか米・麦の配給をした時代、スコップで肥料を配給した時代から思えば、このころは、すべてが好転し、経済成長のはしりのころでもあり、懐かしい時でもある。

無^む双^そ連^れ山^{やま}を中心とせる諸城址の研究

三、徳山城を中心とせる諸城址の

分布と其の遺構 沼館愛三

諸城址の分布は次ページ要図の如くであるが、大体において無双連山の本城を中心として、その居館(常時住んでいる所)としては、初めは堀之内の森の段、後には小長井の徳谷城が設けられ、その支城として北及び東北面に護應土城、秋多和城があり、東南及び南方面には笹間の石上城並びに相模の砦があり、南西方面には大井川筋に郷の城山がある。今その諸城址の位置並びに遺構についてくわしく述べてみれば次の如くなる。

本城 徳山城

(1) 本城の主郭

徳山城は本名土岐山城で、本城山とも呼ばれている。本城の主郭は、志太郡徳山(現中川根町)東川根(現本川根町)笹間(現川根町)の三村にまたがる無双連山の頂上にある。その南は三角標高一〇八三・三メートル高地より、その北方約八〇メートルにいたる細長の尾根を利用して構築されたもので、これを二郭に分けられている。

即ち、その南部は標高一〇八三高地を中心とするもので、現在陣屋平と称するところである。この陣屋平の最南端はナゲ(本城ナギ)と称する断崖で、そこに近く蔵屋敷と称する約四十メートル平方の平坦地があり、その中に三十メートルに二十メートルの広さで約一メートル位高く盛り上げた段がある。これは倉の建物であった所であろう。

特集 徳山城 その2.

さてこのナゲは倉庫の意味ではなく、展望が開けているところから、矢倉、すなわち望楼のあった所ではあるまいか。そしてこの蔵屋敷は三角標高の位置より約四十二メートル低くなっている。同所は五分の一地図にも記入してあるように、ナゲと称する絶壁は目もくらむばかりに、そばたちで、しかも年々崩壊しつつあるから、蔵(倉)屋敷の位置も遠からず破壊せられるであろう。

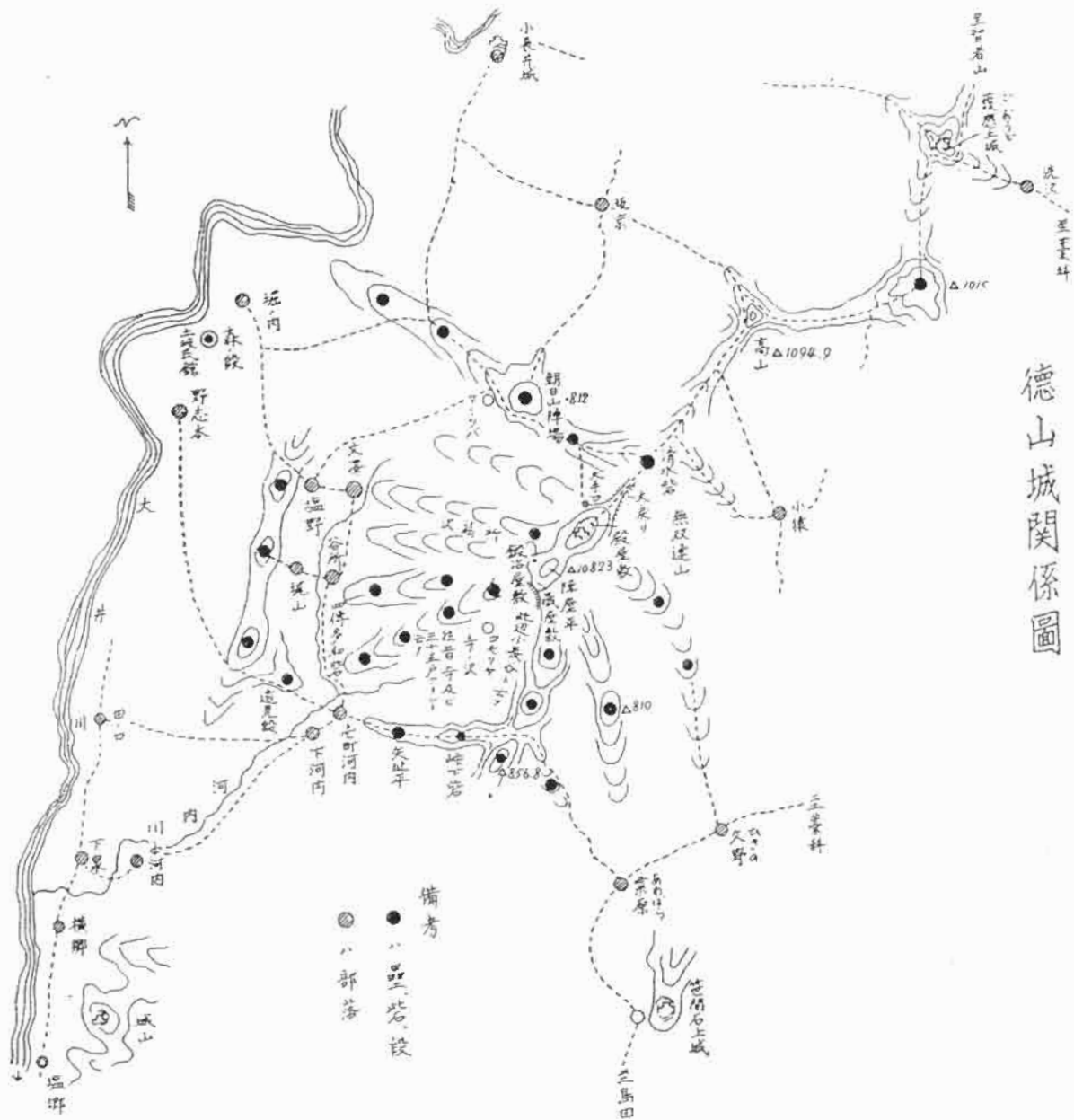
昔土岐山城守が籠城した際、その西南約一・二〇〇メートルの天正平と称する処の奇手の軍勢に向かい、遠天をかけたところと伝えられ、西南一帯を展望できる形勝の地である。倉庫の意味の蔵屋敷は、その北西約二〇〇メートル、少し凹んだ鍛冶屋敷の付近であろう。そこは西方文沢方面に降りる谷頭にあつて、付近には水の手があり、泉水が湧き出している。山城発達時代に於て、刀鍛場はこの様な所に設けられるのが通常である。

蔵屋敷より北方約三〇〇メートルの三角標高一〇八三高地を中心として、南北約八〇メートル、東西約四〇メートル内外の陣屋跡がある。最高部の地形を巧みに利用し、大手搦手の跡が推測される。蔵屋敷より陣屋跡に至る一帯を陣屋平と称し、地味比較的広く水の手も近いから、居館や其の付属建物が設備されていたことと推測される。

陣屋敷北方約一〇〇メートルをへだてて、幅約八メートルの堀割があり、幅四五メートルの尾根を掘開している。この堀以北約一五〇メートルの間は、幅一五・二〇メートル、狭長の尾根で、二ヶ所の塁段があり、本城直接の防御設備をなしている。その北端に門址がある。

これより以北は、現在の字名も本城と呼ばれるところで、陣屋平の高地よりも約七メートル程高く、本城中の最高部で

徳山城関係図

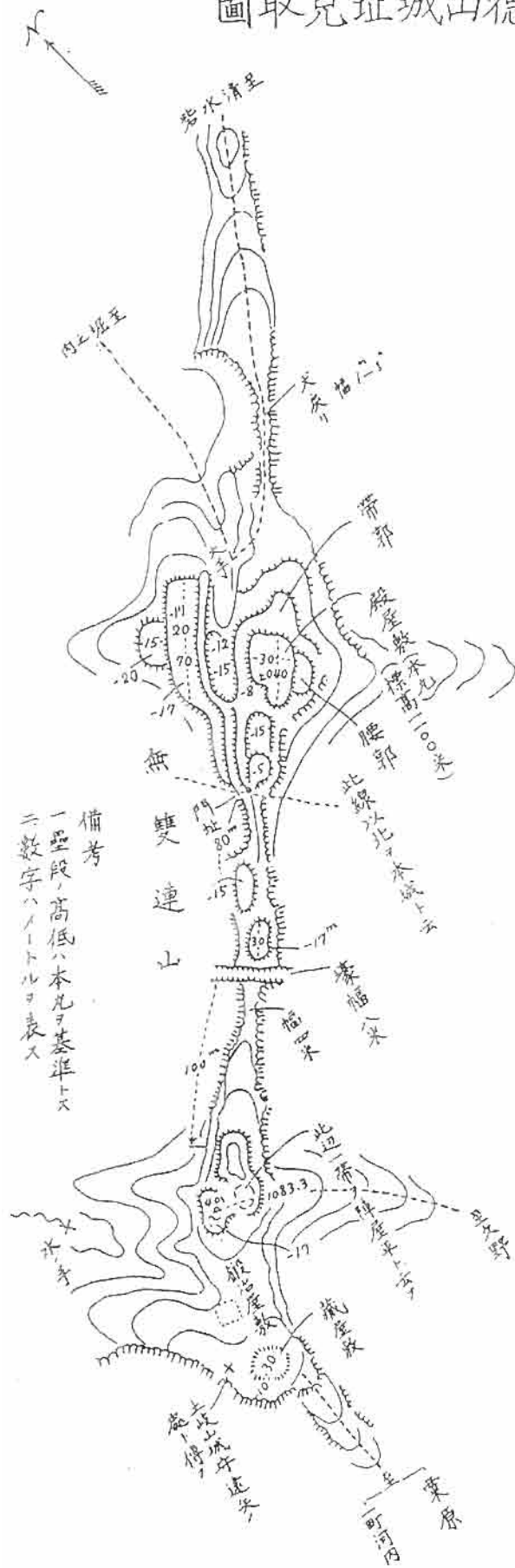


ある。この域内には、六ヶ所の郭があり、標高一〇〇〇mの高地は殿屋敷と呼ばれ、南北約四〇〇m、東西約三〇〇mの平坦地があり、之を以てとして西側に谷地を利用する屋敷地があり、更に高さ三〇m幅約二mの土塁をへたてて、西に長さ約七〇m幅約二〇mの長方形の平坦地がある。ここは本城の最も広い所、兵の集合訓練に用いた所である。

さらにその西側には一段低い所に一つの曲輪がある。殿屋敷の南側には二箇の土塁があり、一つは高く、一つは低く、土塁の間に番所地と思われる、低い方は殿屋敷に位置より十五mも低い窪地となっていて、これは門を準備する兵の潜伏場所であろう。(これと同様のものは、佐伯城及び熊本城にもあり)

殿屋敷の北側には二段の帯郭、東側には一個の腰郭があり、帯郭の北方は大手口で、それぞれ二條の小径があり、その北方に向かうものは高山に通ずる尾根で、西側共に懸崖絶壁、幅一〜三mの犬走りと呼ばれる険難の地で、

徳山城址見取圖



備考
一、一段、高低ハ本凡ヲ基準トス
ニ、数字ハメートル表ス

一兵よく万人に当るの地である。それを更に北進すれば、清水の砦に連絡する。又もう一方の径は、北西に通ずる谷地にあるもので、朝日山の砦を経て、堀之内の居館に通ずるもので、往昔はその主道であつた。従つて、殿屋敷西北谷頭は、大手口に當るわけだ。

(2) 居館

本城に対する土岐氏の平素の居館は、堀之内森の段という所にあつたと言われている。同所は現在堀之内部落と宇野志本との中間の平地の少し高い所にあるが、邸内には土岐井戸と称するものの外、平地にあつた関係上顯著なる遺構を見つけない。多分邸の周囲は壕に囲まれていたであらう。

森の段の館は三方山に囲まれ、西方は大井川に臨み、東西約一六〇m、南北約一〇〇mの平地内にある一郭で、大井川の沿岸は相当物資に豊かであり、山に囲まれている関係上、気候も温

暖で、平素居住の地としては格好の地形をなし、昔は土岐の山家とも稱した。そして本城、無雙連山に通ずる四條の交通路があるから、万一場合の両者の連絡が容易である。その後居館として選ばれたものに、小長井の徳谷城があるが、これは支城としての役目も兼ねたから、後述にて述べることにする。

(3) 本城の附属聖砦

陣屋跡から派生する世間村大塚に通ずる尾根上、標高八〇m高地に一ヶ所、及び蔵屋敷より南方、梨原、壺町河内の峠道の尾根上即ち峠迄に二ヶ所、峠南方の標高八五六・八米高地に一ヶ所の砦跡があり、栗原に下る途中に一ヶ所あり、共に尾根を上つて攻撃して来る敵に対し、ほぼ抵抗出来る様に聖段の經始(縄張)も垂直に近い状態にしてある。

蔵屋敷より壺町河内に向かい派生する寺の沢北側の尾根には

五ヶ所の堅段があり、前者と同様の堅固である。その北方谷所に向かい派生する尾根上には約三ヶ所の堅段があり、最下端のものは四伝多和の堅段である。

附属堅段中独立的任務を有するものは、清水砦、朝日山陣場、塩野砦、梶山砦、遠見段、四伝多和砦、峠下砦などである。

清水砦は本城殿屋敷北方約五百米の所にあって、西方朝日山砦を経て砦之内に通じ、東北高山を経て、洗沢護應土城に通ずる要點であり、かつ本城北方防備の要害となつてゐる。現在幅約十米、長さ三十米の平坦地、並にこれに附随する幅約五米の郭郭だけがわずかに認められる。

朝日山陣場は、清水砦西方約一三〇〇米の標高八〇〇米の開塞曲線の高地で、約方二〇〇〇米の広さをも有し、幾多の堅段より成り、本城と砦之内間の最重要部をなしている。同砦は正平八年二月十八日敵將伊達景宗の一隊が強襲によりて陥落せしめた所である。附近に馬水場と称する水の手がある。

塩野砦は、文沢西方約七〇〇米、標高七四八米の高地で、文沢、堀之内道南側にありて同街道防衛の重要部をなし、その南方六〇〇米の尾根上に梶山砦、更にその南方七〇〇米の所に一つの砦がある。これらは堀之内、田と口方面に対しての要點で、共に幾多の堅段を備えている。

無双連山中朝日山附近より源を発し、文沢、壺町河内、下河内、中河内に沿ひ流れる河内川（土岐の川）、河谷方面に対しては、壺町河内北方に遠見段と称する展望のきく堅段がある。四伝多和の砦は谷所東南約三〇〇〇米の所で、標高約五〇〇〇米を有し、本城山脚における堅段で、正平八年の戦いには、土岐、彦太郎自ら守備したところ、無双連山攻圍戦に於て、土岐、今川両軍最高の激戦地であつたが、二月十八日の夜襲で遂に陥落したところである。

栗原より壺町河内に越える峠の西約三〇〇〇米の地点に、峠下の砦の地がある。長さ約三〇〇〇米、幅四十米の平坦地で、両側は谷地となつており、兵の集合、訓練場としては、適当な地で、西方出口には柵形の跡がある。

以上の諸堅段等は本城を中心として接続し、本城の防備を堅固なものにしてゐる。これら附属堅段は大別して次の二通りがあると考えられます。

◎その一つは、本城を堅固にするもので、本城殿屋敷及び陣屋を中心とし、これより派生する尾根上に設けられたもので、その一つひとつの規模は大きくなくとも、峻峻たる根を巧みに利用し、溪谷の模様と山稜の配置を考え、地形を利用してゐるところに築城の苦心が忍ばれる。

◎他の一つは無双連山を取り巻く外輪を利用したもので、主として西方に多く設けられ、居館堀之内の防備と、文沢、谷所、壺町河内、寺の沢などのいわゆる物資貯蔵地すなわち根小屋の防備を兼ねたものである。



(4) 徳山城に関する地名伝承

蔵屋敷南端のナゲを谷頭とし、壺町河内に至る長さ二〇〇〇mの谷地には、寺の沢の地名が残っている。ここには、土岐氏の盛時に於ては、寺院があり、かつ、三十五戸の人家があったと言われている。しかし、今は、寺もなければ、寺名も不明であるし、人家も全くない。

寺の沢の奥を龍り谷^{リミ}という。これは本城山が敵のため包圍された時、敵が土民に本城に上がる道を尋ねたところ、答えて言うには、「八日のほり七日まわりの楠あり」とつぶやいて、村民は、ここに立籠ったというこゝである。

又、この寺の沢一帯の谷を小長谷とよんでいる。藤川の小長谷と如何なる関係があるか、土岐氏がこの無双連の小長谷に居住して、小長谷を別称し、正平八斗徳山城陥落後、藤川に移り、徳谷城を小長谷城と命名したのであるまいか。

壺町河内東南約五〇〇mの所に矢止平という地名があり、土岐山城守が寄手を射た時、矢尻が落ちたところといわれ、その矢の根を習得した人は、病氣にかかると云われ、今も女人は同所にて、仕事をしないとの事である。今は茶畑となり、南北六五m東西三十m、三段の塁より成る砦址がある。

矢止平に関する伝説は、後世の附会らしく、ヤシはチャシの転化したものと考えられる。チャシあるいは、シャシは、アイヌ語の城砦の意で、いま、この塁址を見てもチャシの形式に類似している。故に、地名からしても土岐山城守を引き出したのではあるまいか。

又、土岐山城守も土岐山の城の守で、山城守という官名に呼んだのではない。故に、土岐山城守は必ずしも一人に限ったわけではない。

文沢より本城山に進入している深谷を祈禱沢という。

これは無双連山上には往昔より無双連神が祀られてあり、

それに土民が祈禱を成したところといわれ、今は無双連神の祠は、文沢に祀られている。蔵屋敷にも

山神の祠があったが、ナゲの崩壊の爲落失している。共に、城の鎮護の神であった。

徳山城西麓谷地の谷所は、矢所の意で

矢を作った所であり、梶山は鍛冶山で、刀鍛冶や野鍛冶のいたところと伝えられ、山城附属の武具製作所と見てよい。更に万一の場合を配慮して、

山上に鍛冶屋敷があるわけである。梶山には鍛冶井戸と称するところがあり、鍛冶の神、金山大明神を祀る祠があったが今は地神を祀っている。

朝日山陣場の附近に馬水場と称する地名があり、飲馬水に供せられた所といわれ、徳山城の水の手として、蔵屋敷西方の溪水と共に重要なところである。

以下次回号に続きます。



